

新約聖書における靈性

内田和彦

キリスト者は「靈的」という言葉を頻繁に使ってきた。この形容詞は、「恵み、祝福、力、賜物、成長、後退、交わり、分かち合い、戦い、勝利、敗北、配慮、援助、解釈」といった名詞とともに、また「靈的に」という副詞も、「恵まれる、強められる、励ます、下がる、落ち込む」といった動詞や、「深い、浅い」といった形容詞との組み合わせで用いられてきた。「靈的とは何か」と問われれば、「物質的の反意語である」とか、「信仰的／信仰上」とか「神が与えてくださるもの」や「神に関わるもの」「クリスチヤン生活に関わるもの」などの説明ができそうであるが、何か曖昧さを拭えない感がある。

加えて近年、「靈性」(spirituality) という言葉も繁く使われるようになり、この語をもって語られる事柄に大きな関心が寄せられている。それもキリスト教会内部だけではない。医療の世界で「靈的」健康が問題になったり、スピリチュアル・ケアが奨められたりしている¹。人生の目的や意義を探求し、愛や正義を希求し、究極的、絶対的存在に畏怖の念を抱く宗教心一般を、

¹ 世界保健機関 (WHO) の 1998 年の総会で、「健康」の定義に肉体的、精神的、社会的ということに加えて「靈的」という語を加えるようにとの提案がなされた。そこには、肉体や精神、社会的関わりばかりでなく、人間にはそれらを越えた何かがあるという認識がある。イスラム諸国の代表から出されたこの提案は結局採択されなかったが、靈的ケアの必要性の認識は医療の現場に広がっている。

宗教学者は「靈性」という言葉で表現している²。それぞれの宗教に固有な体験、敬虔、礼拝や宗教生活全般を「仏教の靈性」「キリスト教の靈性」などと表現することもある。鈴木大拙の「日本の靈性」のように、「靈性」を民族と結び付ける場合もある³。若者たちの間に見られる超常現象や「靈界」に対する関心に言及して、「スピリチュアリティ」が語られることがある⁴。

キリスト教内では、カトリック教会の「靈性」に対する新たな関心が見出される。第二バチカン公会議以降、長い歴史を持つ修道制の中で培われてきた「觀想」や「修練」を⁵、新しく見直そうとする努力が積まれてきている⁶。プロテstant史では、敬虔主義やピューリタニズム、メソジスト運動など、様々な流れをたどることができる。「敬虔、改革、自己訓練、聖潔（きよめ）、キリスト者の完全、獻身、神との交わり、聖靈による歩み、聖靈の満たし、聖靈のバプテスマ」といった、神に従って生きようとするキリスト者の歩みの総体が「靈性」という言葉で表現されて来たように思われる。

このような状況にあって、「靈的」とか「靈性」といった事柄について聖書の示すところを確認することは、聖書に立脚するキリスト者にとって重要な課題である。この小論の目的は、その課題を果たすために、このテーマの新約神学的素描を試みることにある。

I. 「靈」なるもの

「靈性」を論じるとすれば、先ず「靈」について語らなければならない。新約聖書における「靈」は何よりも先ず、人間の靈ではなく神の靈である。

「靈」が指示するところのものは概ね聖靈である。神は靈である（ヨハネ 4：24）。そして神の靈は罪人を新生させ（ヨハネ 3：5-8、6：63、ガラテヤ 4：

² 例えば、伊東雅之『現代社会とスピリチャリティ』（渓水社、2002 年）

³ 鈴木大拙『日本の靈性』（大東出版社、1944 年；岩波書店、1972 年）

⁴ 島薙進『精神世界のゆくえ』（東京堂出版、1996 年）

⁵ 例えば、イグナチオ・デ・ロヨラ『靈操』（岩波書店、1995 年）

⁶ 百瀬文晃・佐久間勤共編『キリスト教の神学と靈性、今日どのように信仰を生きるか』（サンパウロ、1999 年）

29、テトス3:5)、救われた者に内住する(ローマ8:9-11、Iコリント3:16、ヤコブ4:5)。そこに生じる諸々の現実こそが新約聖書の示す靈性であると言えようが、その具体的な内容は後述する。

第二に、人間の靈がある。神によって造られた人間もまた「靈」を有する。イエスは十字架上で「父よ。わが靈を御手にゆだねます」と祈り、自身の「靈を去らせた／お渡しになった」(ルカ23:46とマタイ27:50の直訳、ヨハネ19:30)。ステパノもイエスに向かい「私の靈をお受けください」と祈る(使徒7:59)。ヤイロの娘は「靈が戻って」来て蘇生した(ルカ8:55)。死んだ聖徒たちは「全うされた義人たちの靈」と呼ばれている(ヘブル12:23)。

人間の「靈」は体(Iコリント7:34)、魂(ヘブル4:12)、そして魂と体両方との組み合わせで語られる(Iテサロニケ5:23)。「靈なしのからだは死んだものである」と言われ(ヤコブ2:26の直訳)、心に安らぎを与えることが、靈を安心させる／生き返らせると表現されている(Iコリント16:18、IIコリント7:13)。

エイレーナイオスは、靈を失い魂と身体しか持たない未信者と違い、信者は聖靈によって靈も与えられているとしたが(『異端駁論』II.33.5)、靈は信者、未信者を問わず人の内に存在している。パウロはイエスを拒む者たちを「鈍い靈」と表現しているし(ローマ11:8)、上述の個所の内の幾つか(ルカ8:55、ヘブル4:12、ヤコブ2:26)において言及されている靈は、人間一般に当てはまるとして語られていると思われるからである。したがって、創造論的な視点から人の内にある「靈の渴き」といったものを推論することができようが、それだからといって、新約聖書は人間一般の「靈性」について積極的に語ろうとしているとは言えない。

第三に、神の靈でも人間の靈でもない「靈」が存在する。御使いが「仕える靈」と言っているヘブル1:14を除けば、それはすべて「汚れた靈」や「惡靈」である⁷。「口をきけなくする靈」「病の靈」「占いの靈」「惑わす靈」

⁷ マタイ10:1、12:43、マルコ1:23、3:11、ルカ7:21、8:2等、共観福音書に多く、使徒の働きや黙示録も含めると三十数回言及されている。さらに δαιμων、δαιμονίον、δαιμονιζόμενον といった語でも「惡靈」や「惡靈につかれた者」の存在が語られている。

も惡の靈である。パウロによれば、キリスト者は「不従順の子らの中に働いている靈」から解放され、「天にいるもろもろの惡靈」との戦いに召された者たちである(エペソ2:2、6:12)。

それゆえキリスト者は「靈」を判別しなければならない。パウロは「異なった靈」や偽りの預言の靈を警戒するようにと促し、「靈を見分ける力」を聖靈の賜物に加えている(IIコリント11:4、IIテサロニケ2:2、Iコリント12:10)。キリストに栄光を帰すこと(ヨハネ16:14)、聖靈が与えた神の啓示の言葉に合致していること(ヨハネ14:26、15:26、16:13)、キリストの受肉を告白すること(Iヨハネ4:1-3)、信仰の共同体による教えと調和することが(同4:6)、真理の御靈と偽りの靈を区別する手掛かりとなる。

II. キリスト者の「靈性」

1) キリスト者の靈

新約聖書はキリスト者の靈に若干言及している。パウロの4つの書簡は「主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの靈と共にあるように」という祈りで終わる(ガラテヤ6:18、ピリピ4:23、IIテモテ4:22、ピレモン25)。肉体と靈を二元論的に対峙させるのではないが、確かにキリスト者の思いや行動を司る靈の状態は重要である。それは「靈に燃え、主に仕えなさい」という勧めや、アポロが「靈に燃えて」いたという描写からも明らかである(ローマ12:11、使徒18:25)。これらの個所における「靈」は神の靈である可能性もあるが⁸、その場合でも、キリスト者の靈は聖靈が働く場として重要である。

しかし、聖靈が内住するキリスト者の靈は、それだけで既に「靈的」で、すぐれた「靈性」を有しているわけではない。「靈」はきよいから、汚れた「からだ」から離脱すべしと命じられててもない。確かに、からだにある「罪の律

⁸ EDNT 1:99-100; Douglas J. Moo, *The Epistle to the Romans*. (Grand Rapids: Eerdmans, 1996) p. 778 参照。

法」がキリスト者をも虜にしているので、「だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と嘆きの声を上げるし(ローマ 7:23-24)、罪の道具として利用されるからだは「死ぬべきからだ」であるから、「御靈によって、からだの行いを殺」すことが課題となる(ローマ 8:11, 13)。けれども、からだが「靈」に比べて特別に汚れているのではなく、私たちの靈 자체がきよめられなければならない⁹。そこでパウロは、「いっさいの靈肉の汚れから自分をきよめ・・・ようではありませんか」と勧めるのである(II コリント 7:1)¹⁰。このようにキリスト者の靈は重要であるが、その靈が真に「靈的」であるのは、あくまでも聖靈の働きによるものである。

2) 「御靈の人」としてのキリスト者

パウロはキリスト者を「靈的(πνευματικός)」と形容する。聖靈によって再生していない者は神の御靈に関わることを受け入れることも悟ることもでき

⁹ パウロは、不品行を悔い改めない者たちをサタンに渡したのは「彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の靈が主の日に救われるためです」と書いている(I コリント 5:5)。これは、せめて靈だけでも救われるようになるという意味ではない。教会戒規に処せられることで肉の性質がきよめられ、聖靈によって生かされるようになった人が救いに与るということである(Gordon D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (Eerdmans, 1987) 208-213 参照)。また、「(死者が)肉体においては人間としてさばきを受けるが、靈においては神によって生きるためでした」という言葉(I ベテロ 4:6)は、肉体と違って靈はきよいので救われると教えているわけではない。先に死んだ信者たちの肉体は、人に課せられた罪の結果としての死を刑罰として受けたことになったが、靈においては生かされている、という意味である。

¹⁰ パウロが3回言及している「内なる人(ό εσω ἄνθρωπος)」は、聖靈の影響下にある靈を意味しているのではないか。「神の律法を喜んでいる」「内なる人」は、御靈によって強められる必要がある(ローマ 7:22-23a、エペソ 3:16)。「外なる人が衰えても」失望しないのは、内なる人が日々新しくされるからである(II コリント 4:16)。パウロは「キリスト者の靈/靈性が強められる/新たにされる」と表現してもよかつたのであろうが、それを「内なる人」と表現することで、靈とからだの二元論的理解を避け、聖靈によって絶えず新しくされる靈において生きるキリスト者の存在をトータルに示そうとしているように思われる。

ないのに対し、キリスト者は「御靈の人/御靈に属する人([ό πνευματικός])」であるゆえ、「すべてのことをわきまえ」、神の「奥義」(I コリント 2:7)を理解することができると教えている(同2:14-15)。

しかし、コリントの信者に対してパウロは「御靈の人」に対するように話すことができず、「肉に属する人(σαρκίνοις)」、靈的に未熟な「幼子」に対するように話さなければならなかつたと回想し、それが今も変わっていないと嘆いている(同3:1-3)。それは、彼らがねたみや争いをもつて「ただの人のように(κατὰ ἄνθρωπον)歩んでいる」からである。このように「御靈の人」であっても、非キリスト者と同じ原理に従つて生きるなら「肉に属している(σαρκικοί)」ことになる。「御靈の人」はまた、コリント教会において御靈の賜物を有する人たちの自称でもあった(同14:37)。パウロは彼らの自負心を逆手に取つて、それならば自分の書いていることが「主の命令」であることが認められるはずだと迫つてゐる。それは御靈の賜物が与えられている「御靈の人」が教会の徳を高めず、かえつて混乱をもたらしていたからである。

このように「御靈の人」をめぐつてパウロが書いていることからも、聖靈をいただいている「御靈の人」が真に靈的であるとは限らないことがわかる。それゆえ、彼がガラテヤの信者を「御靈の人」と呼ぶのも、彼らが肉の欲に従わずに御靈によって歩むよう勧めた上でのことである(ガラテヤ 5:16-6:1)。

3) 聖靈の生みだす資質

聖靈は罪人を新生させ、新生した者に内住される(ローマ 8:9、I コリント 3:16、II コリント 1:22、ヤコブ 4:5)。同時に、御靈の内住をいただいた者は聖靈の中にいる(ローマ 8:9)。しかし、いつでも聖靈に従つてゐるとは限らず、肉に留まりやすい。そこでパウロは、肉に従わなければならぬ負い目はないと宣言し(ローマ 8:12)、「御靈によって歩みなさい」「御靈に満たされなさい」(ガラテヤ 5:16、エペソ 5:18)と命じるのである。この命令に従い続ける者の内に、聖靈は新しい人格的資質を生み出される。

その資質は、何よりも先ず「愛(ἀγάπη)」である。御靈の賜物が豊かに与

えられていながら「肉に属する人」であったコリントのキリスト者に対し、パウロは「愛」を強調している（I コリント 13 章）。自分に愛がなければ豊かな賜物も「やかましいどちらや、うるさいシンバル」と変わらず、（私には）何の値打ちもない (*οὐθέν εἰμι*) と書いている。持ち物や生命を犠牲にしても、愛がなければ何の益もないと言い切っている（1-3 節）。その上でパウロは、愛がどのように働くかを語る（4-7 節）。その根本にあるものは自分の益ではなく他の人の益を図ることであり、それゆえにまた、忍耐深く礼儀正しくあること、信仰や希望に満ちていること、妬みやプライドや高慢、復讐心から解放されていることなどの具体例が挙げられる。

ガラテヤ 5:22-23 に記された「御靈の実」もまた、愛を中心としている。「実（単数形の *ό καρπός*）はまず「愛」であり¹¹、その特徴がさらに 8 つの名詞で表わされているが、その内容は I コリント 13 章の愛の働きとかなり重なっている。「喜び、寛容、親切」は用語自体が対応（*συγχάρει* と *χαρά*、*μακροθυμεῖ* と *μακροθυμία*、*χρηστεύεται* と *χρηστότης*）、「平和」「善意、誠実、柔軟、自制」といった実は、「礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜」ぶといったことと内容的に重なる。どちらかと言えば、「自慢せず、高慢に」ならないとか、「すべてを信じ、すべてを期待」するといったことを挙げる I コリントのリストの方がより包括的であるが、中心にあるものは確かに共通している¹²。

これらのリストには欠けているが、謙遜（*ταπεινοφροσύνη*）もまた重要な実である。パウロは、教会の一致を推進するために必要なものとして、まず謙遜を挙げている（エペソ 4:2-3）。謙遜に教会の一致の鍵があるとし、その模範としてキリストを見るよう訴えている（ピリピ 2:1-11）。見せかけ

¹¹ パウロは、「愛は律法を全う」するとし、「他の人を愛する者は、律法を完全に守っている」とする（ローマ 13:8、10。また、すべての徳を結び合わせるものとしての愛を語る（コロサイ 3:14）。このようにキリスト者の品性と行動において「愛」は抜きん出ている。

¹² ルカ 10:21、使徒 11:24、ローマ 14:17、15:13、30、II コリント 4:13、コロサイ 1:8、I テサロニケ 1:6、II テモテ 1:7 にも愛、喜び、信仰、希望などの実が語られている。

だけの謙遜のあることを弁えた上で「深い同情心、慈愛……柔軟、寛容」とともに謙遜を身に着けるようにと勵ましている（コロサイ 2:23、3:12）。ペテロもまた、箴言 3:34 に基づいて「互いに謙遜を身に着け」るよう命じ、しもべたち、妻たち、夫たちに対する勧めの結びでは、同情、兄弟愛、憐れみ深さ等とともに、謙遜であることを求めている（I ペテロ 5:5、3:8）。

聖靈によって生み出される「靈性」の特徴は、それに対立する「肉」の働き（ローマ 8:4-6、ガラテヤ 5:16-18）からも推量られる。コリントの教会に見出された「肉」としては、ねたみや争い、党派心、義母を妻とするような不品行、さらには、兄弟を躊躇させても意に介さないとか、他の人を顧みないとか、見下すとか、教会全体の益を図らず好き勝手に賜物を用いるといった、利己的な態度があった（I コリント 1:10-12、3:3、5:1、8:9-13、9:23-33、11:17-22、12:21、14:4-19、26-33）。このような肉は他の教会に宛てられた書簡でも取り上げられてれている。中でも目を引くのは、愛の欠けた自己中心的態度（エペソ 4:31、ピリピ 2:3-4）、貪欲（エペソ 5:3、5、コロサイ 3:5、I テサロニケ 4:6、I ヨハネ 2:16 等）、欺きや虚偽、不正（コロサイ 3:9、I テモテ 3:8、ヤコブ 5:1-6 等、cf. 使徒 5:1-11）、偏見や差別（I テモテ 5:21、ヤコブ 2:1-9、3:17）、性的不道徳（ローマ 13:13、エペソ 4:19、5:3、I テサロニケ 4:3-7、ヘブル 13:4）である。ガラテヤ 5 章の肉の行いのリストでは、欲望（特に性的な欲求）が抑制できない状態や偶像礼拝と共に、敵意、党派心、分裂といった人間関係を損なうものが挙げられている。真の靈性とはこうした肉に支配されず聖靈によって生きることに他ならない（ローマ 8:12-13、ガラテヤ 5:25、6:8、I ペテロ 2:11）。

4) 聖靈による教導への服従

聖靈は肉を克服させ愛のある人格を形成するばかりでない。そもそも神ご自身に対する姿勢を変える。御靈によって神を「アバ、父」と呼び、親しい交わりに進むとともに（ガラテヤ 4:6、ローマ 8:14-16）、神の導きに従つて生きることも、「靈性」の特徴である。

聖靈は「啓示の御靈」である。神のみこころは「すべてのことを探り、神

の深みにまで及ぼれる」御靈のみが知っている。その御靈を受けて、人は十字架の福音を理解する（I コリント 2:10-12）。神の啓示に眼が開かれた者は、さらに「神を知るための知恵と啓示の御靈を」祈り求めていく（エペソ 1:17）。このように御靈は福音の奥義を知らしめるゆえ、「宣教の御靈」でもある。主イエスは弟子たちを伝道に遣わす際、語るのは彼らの内にある聖靈であると教えた（マタイ 10:20、ルカ 12:12）。パウロの宣教も「御靈と御力の現われ」で、神の恵みを説くには「御靈に教えられたことばを用い」なければならなかった（I コリント 2:4、13）。さらに、聖靈は「知恵の御靈」でもある。御靈に満たされた者たちには知恵があった。寡婦たちの配給を使徒たちに代わって任せられた者たちが好例である。そのひとり、ステパノの宣教に反対者たちは対抗できなかった（使徒 6:3、5、8-10）。このような神のみこころに対する洞察や、宣教や奉仕における知恵によっても、靈性は表わされる。

こうした御靈の働きに対するキリスト者の応答は「服従」である。聖靈の導きに従うところに靈性があることを、弟子たちの宣教活動は顕著に示している。コルネリオの使者を迎えたペテロは聖靈の指示に従ってカイザリアを訪れた（使徒 10:19-20、11:12）。アンテオケの会衆は聖靈に従い、バルナバとサウロを宣教に派遣した（同 13:2-4）。パウロは御靈によって禁じられて計画を変更、マケドニアに渡った（同 16:6-10）。彼は全行程にわたって聖靈の指示を仰いでいた（同 19:21）。縛目と苦難が待ち受けていると示されても、主の導きであれば彼は従ったのである（同 20:22-23、21:10-14）。

5) 服従／従順と靈性

新約聖書の靈性は、確かに服従を抜きにして語ることができない。キリスト者生活の全体が、主に従う歩みと表現することができる。

シモンとアンデレ、ヨハネとヤコブは「私について来なさい」というイエスの招きに応え、網や舟、父親を残して従った（マタイ 4:18-22 par.）。ペテロと同郷のピリポや、カペナウムの収税所で働いていたマタイも、同じ招きに従った（ヨハネ 1:43、マタイ 9:9）。弟子として従うことは決して容易

なことではなく、越えなければならないハードルがあった¹³。その困難さを示すものとして、共観福音書は「金持ちの青年」の話を伝えている（マタイ 19:16-22 par.）。彼の去る姿を見送ったペテロたちは、自分たちは「何もかも捨てて従って来た」と胸を張るが、その彼らにしても繰り返し試みに会っている。湖上で嵐に会ってパニックに陥り、信頼の欠如を露呈する（マルコ 4:35-41）。パンの奇蹟の後、多くの者がつまずいて離れ去った時、動搖は十二弟子の間にも広がった（ヨハネ 6:66-69）。奇蹟から学ばず、心が閉じていて、湖上を歩くイエスに驚き怪しこともある（マルコ 6:48-52）。弟子たちの無理解は折々叱責されている（マルコ 7:18、8:17-18、9:19）。ピリポ・カイザリアで、受難予告を聞いたペテロが示したの反応は、メシア王国での栄達を目論んでいた野心を暴露してしまった（マタイ 16:13-23 par.）。ユダは銀貨 30 枚でイエスを売るが、ペテロも大祭司の官邸で見とがめられイエスとの関係を否定することになった（マタイ 26:14-16、69-75）。復活の主から新たに召命を受けた後も、ヨハネと自分を比較して、再度「あなたは、私に従いなさい」と諭されることになった（ヨハネ 21:21-22）。驚くべきことに、イエスの昇天の直前でもペテロは地上の王国の再興を夢見ていたのである（使徒 1:6）。こうした弟子たちの姿を描くことで、新約聖書は「自分の十字架を負い」イエスに従うこと（マタイ 16:24）の困難さを明らかにしている。

真の靈性が、父なる神と主イエスに従い続けていくところにあるという真理は、書簡でも明らかにされている。パウロにとって、人が福音を信じるということは、単に救い主を受け入れるだけでなく、神に対して従順な者となることを意味していた（ローマ 1:5、16:26¹⁴、さらに 15:18、16:19 も

¹³ ルカ 9:57-62。特にルカは、ガリラヤ湖の漁師の場合もレビの場合も、何もかも捨てて（ἀφέντες / καταλιπών πάντα）従ったことを強調している。とりわけ取税人である後者の場合、元の仕事に戻ることは困難であって、πάντα と表現したことは決して誇張ではない。

¹⁴ ローマ書の冒頭と結びの両方で語られている ὑπακοὴν πίστεως は「信仰がもたらす従順」「信仰から生れる従順」「信仰をもたらす従順」「信仰という従順」等、様々に解釈されてきたが、おそらく、これらのものを包括的に表現する

参照)。救われた者が「従順の奴隸」となること(同6:16)、キリストに対する従順が完全になることを(IIコリント10:5-6)彼は切望していた。

その従順は、自身も主に従う指導者たちに対するものもある。パウロは献身的な奉仕者たちに従うよう勧めているし(Iコリント16:15-16)、ペテロは、神に従っている長者たちに従うよう命じている(Iペテロ5:5)。さらに、お互いの間でも、地上の為政者に対してさえも、従順であることが求められている(エペソ5:21、ローマ13:1-5)。妻は夫に対して、奴隸は主人に対して「主に従うように」従うことが勧められている(エペソ5:22、6:5)。

なぜ従順が重要なのか。それはイエスご自身が従順であったからである。神のひとり子イエスはひたすら御父に従った。御子は御父から遣わされ、御父から聞いたとおりにさばき、御父が行なうことをみな行なった(ヨハネ5:19、30、7:28、29、8:26)。その従順は天の父ばかりでなく、地上の両親にも向けられた(ルカ2:51)¹⁵。こうした御子の従順を、パウロはアダムの不従順と対比して、その従順ゆえに罪人が義とされる道が開かれたとしている(ローマ5:19)。救いが完成する終末、「万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われる」(Iコリント15:28)。そのように従順な御子、十字架の死にまでも従われた方こそ、キリスト者の靈性の模範である(ピリピ2:5-8)。

ペテロもまた従順を重んじている。彼が手紙を宛てたのは、キリストに対する従順に導き入れられた者たちであり、真理に対する従順によってたましいを清められた者たちである(Iペテロ1:2¹⁶、22)。彼らは「従順な子と

general genitive の用例を見る Zerwick の見解が妥当であろう(M. Zerwick, *Biblical Greek*. trans. and adapted by J. Smith [Rome: Biblical Institute Press, 1963], § 36-38)。

¹⁵ ルカ2:51には ήν ὑποτασσόμενος αὐτοῖς とある。新改訳は「両親に仕えられた」と訳しているが、むしろ「両親に対して(ずっと)従われた/従順であった」ということである。

¹⁶ εἰς ὑπακοὴν καὶ ῥαντισμὸν αἵματος Ιησοῦ Χριστοῦ は「イエス・キリストの(所有している)従順と血の注ぎに導き入れられた」と解することもできる。

して」、罪深い欲望に従うことなく、彼らを召された聖なる方にならって聖なる者とならなければならない(同1:14)。その方、つまり、不当な苦しみを耐え忍び、十字架において贖罪の死を遂げられた方の足跡に従うように、奴隸の信者をペテロは励ます(同2:18-25)¹⁷。御父に対する主イエスの服従にならうところに、キリスト者の靈性が形成されるのである。

6) 精神のための修練／訓練

服従や従順は修練や訓練から生まれる。ヘブル人への手紙には「良い物と悪い物とを見分ける感覚」が経験によって訓練される(γεγυμνωμένα)ことや、神がご自身の聖さに与らせようとして課す訓練(παιδεία)を耐え忍ぶことの大切さが語られている(5:14、12:5-13)。苦難を始め人生の様々な経験を用いて神は靈性を育てられるので、私たちは忍耐と信頼をもって従い続ける必要がある。パウロも、キリスト者が世と共に断罪されないために、神によって懲らしめられると教え、その確信のゆえに、信仰の破船に会った者たちを戒規に処している(Iコリント11:32、Iテモテ1:19-20)。神の民が「慎み深く、正しく、敬虔に生活」するよう訓練する(παιδεύουσα)のは、神の恵みなのである(テス2:12)。確かに神は、愛するからこそ、キリスト者が熱心に悔い改めるよう「しかったり、懲らしめたりする」のである(黙示録3:19)。

神ご自身による懲らしめや訓練があるだけでなく、キリスト者は自らを鍛錬することが期待されている。パウロはテモテに対し「敬虔のために自分を鍛錬しなさい(Γύμναζε δὲ σεαυτὸν)」と勧めている(Iテモテ4:7)。鍛錬と言えば、禁欲的な自己訓練を想像し易いが、彼はむしろ、偽善的な禁欲主義を警戒するよう文脈で述べている(同4:1-5)。何をもって「鍛錬」と考えているかは必ずしも明瞭ではないが、福音を忠実に伝えて、信者の模範とな

¹⁷ ピリピ人への手紙では、教会が一致するために必要な従順とへりくだりの模範であったが、ペテロの手紙第一では苦難に耐えるための励ましとなる模範である。しかし、神のみこころに服したキリストの模範にならうという点で、二者は共通している。

るべく己を律していくことであると思われる¹⁸。「教えと戒めと矯正と義の訓練のため (πρὸς παιδείαν τὴν ἐν δικαιοσύνῃ)」有益である」と言っている聖書のことばが、そのために用いられるのであろう(II テモテ 3:16)。

「身を慎みなさい」という命令も自己修練の勧めである。パウロは、キリストの再臨に備えるのに慎み深くしていよう(μῆφωμεν)と激励し(I テサロニケ 5:6、8)、伝道者としての務めを果たすためあらゆることにおいて慎むよう(μῆφε、II テモテ 4:5)命じている。ペテロも、キリストの再臨を待ち望み、終りの時が近いことを覚えて、悪魔の攻撃に備えて、身を慎むよう命じている(μῆψατε、I ペテロ 1:13、4:7、5:8)。パウロは「自分からだを打ちたたいて従わせる」といった激しい表現を用いているが、それも、福音宣教という目的のために自己を制御することを述べているのであって、自己目的化された禁欲の勧めではない。こうした一連の教えを見ると、キリスト者の自己修練において、最も大切なことは、「自制」という聖靈の実ではないかと思われる。

7) 苦難と靈性

神に従うことには苦難が伴う。イエスは自ら十字架に進むとともに、弟子たちにも十字架を負うことを求めた。そこで、メシアが苦難に会うはずがないと考えたペテロを、苦難の回避を説くサタンの側に立つ者として叱責した(マタイ 16:21-24、4:1-11)。弟子たちの派遣は「狼の中に羊を送り出すようなもの」とし、当局による圧迫や肉親による迫害など、諸々の反対を覺悟するよう求めた(同 10:16-23)。苦しみに会い「義のために迫害される」ことこそ、神が共におられることのしるしであるとしたのである(同 5:10-12)。

実際、教会は最初から苦難に会った。拘束されたペテロとヨハネはサンヘドリンで尋問され(使徒 4:1-32)、続いて他の使徒たちとともに投獄され、鞭打たれた(同 5:17-42)。ステパノはその神殿批判がユダヤ人の怒りを買って殉教した(同 6:8-8:3)。ペテロは危ういところで難を逃れたが、ヤコ

¹⁸ J. N. D. Kelly, *A Commentary on the Pastoral Epistles*. reprint ed. (Grand Rapids: Baker, 1981), p. 99.

ブはヘロデ・アグリッパ一世により死に至らしめられた(同 12:1-17)。弟子たちは苦難を神に対する服従の結果として受け入れ、「御名のためにはずかしめられるに値する者とされたこと」を喜んだ(同 4:19、5:29、41)。苦難に会って、むしろ宣教は進んだのである(同 4:31、5:42、8:4、12:24)。

神に従う者は苦しみを避けられないということは、パウロの確信である。彼は、患難が忍耐や練られた品性を生み出すと述べて、苦難が聖化において果たす役割を認めている(ローマ 5:3-4)。それは、十字架を忍んだイエスに目を留めるよう励ましつつ、聖化を意図して「懲らしめ(παιδεία)」を与える靈の父に服従するよう説くヘブル 12:1-13の教えに通ずる。ペテロもキリストの苦難に言及し、「肉体において苦しみを受けた人は、罪との関わりを断つ」と語り、人生の残りの時を欲望のためでなく、神のみこころのために生きるよう勧めている(I ペテロ 4:1-3)。確かに、苦難は人を神に近づける(II コリント 1:8)。苦しみにおいて人はキリストの慰めを知らされる(II コリント 1:4)。苦難は靈性にとって重要な意味を持っている。

神の子とされたキリスト者は、「共同の相続人」としてキリストの栄光に与る前に苦難を共に受け継ぐ(ローマ 8:17-18)。パウロはキリスト者の人生全体を、キリストがたどられた道を型とする、苦難から栄光へという図式で捉えている(II コリント 4:17, cf. ピリピ 2:5-11)。また苦難から栄光へという展開は、自身の苦難が他の人に栄光をもたらすという意味においても見出される。パウロは、苦しみを伴う奉仕を通して他のキリスト者に慰めと救い、いのちがもたらされるゆえに(II コリント 1:6、4:12)、自分の苦しみが「あなたがたの栄光(δόξα ὑμῶν)である」と語るのである(エペソ 3:13, cf. II テモテ 2:10)¹⁹。この苦しみは偶発的ではない。パウロの苦しみは「キリストの苦しみの欠けたところを満たしている」(コロサイ 1:24)。すなわち、救いの完成までにキリストのからだなる教会が満たすべき苦難があ

¹⁹ この言葉を「あなた方の益になる」といった一般的な意味に解消せず、「栄光」という言葉でパウロが普通に意味していることと読んだ方がよい。cf. Peter T. O'Brien, *The Letter to the Ephesians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1999), pp. 251-2.

るので、彼の苦難はその欠けを補うものとして、教会全体に益をもたらすのである²⁰。

聖徒たちの現在の苦難と将来の栄光は、黙示録のテーマでもある。自ら苦難に会っているヨハネは、苦難の教会に対し、苦しみを恐れず死に至るまで忠実であるようにと励ます（黙示録2:8-11）。耐え忍ぶ者たちには「いのちの冠」が約束されている。やがてあらゆる患難から解放され、安息を得る時が来る（同7:9-17、21:4）。その時、神の民を苦しめた者たちは「神の怒りのぶどう酒を飲む」ことになり、その「苦しみの煙は、永遠にまで立ち上」ることになるのである（同14:10-11、cf. 16:10-11、18:7-20、20:10）。

新約聖書はイグナティオスのように、殉教を神に到達するための特別な道として称揚していない²¹。しかし、「神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と、キリスト者に覚悟を促すのである（使徒14:22）。

8) 富の放棄と靈性

靈性と富の関係はどうか。永遠のいのちを得るために「何をしたらよいか」と尋ねた金持ちの青年は、「完全になりたいなら、あなたの持ち物を全部売り払い貧しい人たちに与えなさい」というイエスの要求に応じなかった（マタイ19:16-22 par）。これに従った者は教会史において少なくないが²²、富や所有の全的放棄をイエスがいつでも求めたわけではない。彼は、業によって神の国に入ると信じていた青年にその方策の無力さを教え、律法を守っていない現実に気づかせようとして、このような指示を与えたのである。しかしながら、富は従うことの妨げとなり得ることも事実である。だからこそ、イエスは、天に宝を積むよう求め、神と富に同時に仕えることはできないと警

²⁰ Murray J. Harris, *Colossians & Philemon* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991), pp. 65-6; Peter T. O'Brien, *Colossians and Philemon* (Waco: Word Books, 1982), pp. 77-81 参照

²¹ イグナティオス「ローマ人への手紙」4章参照

²² たとえば、エジプトのアントニウス、ミラノのアンブロシウス、アッシジのフランシス、リヨンのペテルス・ヴァルド等。

告したのである（同6:19-24）。パウロも「金銭を愛することが、あらゆる惡の根」であると言いつていている²³。しかし、富は世の誘惑のひとつであってすべてではない。所有の放棄が自動的に神に対する献身を実現するわけでもない²⁴。実際、青年が去った後、一切を捨ててイエスに従ったはずのペテロが「何がいただけるのでしょうか」と問うたこと（同19:27）は、問題の本質が別のところにあることを示している。

新約聖書が一貫して強調していることは、自らの靈性の深化のための富の放棄というより、貧者を助ける愛の行為である。施しに入り込む偽善についてのイエスの教え（マタイ6:2-4）は、自分のために行う施しに対する警鐘を鳴らしている。終りの日のさばきは、自らも忘れているような憐れみの行為を基準として行われるのである（同25:31-46）。騙し取ったものの返却と貧者への施しを約束したザアカイは自分の利益を計算していない（ルカ19:1-10）。憐れみ深い者を神は憐れみをもって扱ってくださる（マタイ5:7）。パウロも惜しみなく分け与えることを勧め（ローマ12:8）、そのために堅実に働くよう命じている（エペソ4:28）。ヤコブも、孤児や寡婦を助ける愛の行為を欠いた信仰の空虚さを強調しつつ、食物や着物を提供する具体的な援助を推奨する（ヤコブ1:26-27、2:14-17）。同様にヨハネも、困っている兄弟たちを助けるよう促している（Iヨハネ3:17-18）²⁵。

新約聖書の教会は完璧ではなかったが²⁶、愛による援助を実践していた。エルサレム教会では、富者は貧者の支援のために資産を、あくまでも自発的

²³ I テモテ6:10。II テモテ4:10で「デマスが今の世を愛し」パウロを見捨ててしまったと言われているのも、金銭の誘惑に屈したためかもしれない。

²⁴ このことは、財産の放棄を実行した修道士たちの証するところでもある。イグナチオ・デ・ロヨラ「靈操」31頁以下参照。

²⁵ この種の教えは旧約聖書でも繰り返されている（出エジプト23:11、レビ19:9-10、申命記15:7-10、ヨブ29:12、詩篇37:21、箴言31:20、イザヤ58:7、ゼカリヤ7:9）。

²⁶ ギリシャ語を使うユダヤ人の寡婦たちに対する配給がなぜか滞っていた（使徒6:1）。

に提供していた（使徒2:44-45、4:34-35、5:3-4）²⁷。こうした愛の実践は、アンテオケ教会によるエルサレム教会の支援という形に発展する（同11:27-30）。また、行く先々でパウロが支援を訴えた結果、マケドニアやアカヤ等の教会からの醸金がエルサレムに届けられることになったのである（IIコリント8-9章、ローマ15:25-27、使徒24:17）²⁸。

このように、貧しい者たちを助けるため富を捧げるところにも、靈性のあるべき姿を見ることがある。

III. 精神性と「神のかたち」

キリスト者の靈性の模範として、私たちはこれまでキリストの靈性を見てきた。それは、キリストが「神のかたち（ένκών τοῦ θεοῦ）」だからである（コロサイ1:15、IIコリント4:4）。神は目に見えないが、その栄光はキリストにおいて表わされている。私たちがキリストを見るとき、神（の栄光）を見ることができると、新約聖書は証する（IIコリント4:6、ヨハネ1:18、14:9、cf. ヘブル1:3）。

パウロは *Ordo Salutis* を記す際、救いへの予定を「御子のかたちと同じ姿（συμμόρφους τῆς εἰκόνος τοῦ νιοῦ αὐτοῦ）にあらかじめ定められた」と表現している（ローマ8:29）。墮罪によって損なわれた神のかたちが、御子のかたちと同じ姿となることによって回復する。そのことによって「御子が多くの兄弟たちの中で長子」となるのである。そこに罪人を救う神の計画がある。その回復の過程をパウロは「顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら（τὴν δόξαν κυρίου κατοπτριζόμενον）、栄光から栄光へと、

²⁷ 財産を共有し共同生活をしていたかのように言われている使徒2:44は、一時的にクムランの共同体に見られたような生活形態をとる者たちが居たということか、あるいは彼らの愛の行為をやや誇張的に表現したものであるか、いずれかであろう。cf. I. H. Marshall, *The Acts of the Apostles* (Grand Rapids: Eerdans, 1980), p. 84-85.

²⁸ ガラテヤ2:10からすると、使徒の働きに報告されていない初期の伝道において既に、パウロは援助活動を実行していたものと思われる。

主と同じかたちに姿を変えられて行」（τὴν αὐτὴν εἰκόνα μεταμορφούμεθα）と表現している（IIコリント3:18）。神の臨在のもとから退いたモーセがイスラエル人に語りかける際、顔を覆わなければならなかつた古い契約と違い、新しい契約においては、神の民は神との交わりの後、顔を覆う必要はない。私たちはみな、キリストの栄光を覆い無しの顔で反映する、というのである²⁹。しかもこの変化は、「御靈なる主」の継続的な働きによるものである³⁰。

同じ真理をパウロは、着替えの比喩によって説明している（コロサイ3:9-10）。「古い人」、すなわち罪の奴隸であった時の人間性をキリスト者は脱ぎ捨てた（ἀπεκδυσάμενοι）。そして「新しい人」、聖靈によって支配された人間性を着たが（ένδυσάμενοι）、「新しい人」は既に完全となったわけではなく、「造り主のかたちに似せられます新しくされ」て行かなければならない（ἀνακαμνούμενοι）。エペソ4:22-24の三つの不定形、「古い人を脱ぎ捨てる」と（ἀποθέσθαι）、「心の靈において新しくされること（ἀνανεῦσθαι）」、「神にかたどり造り出された新しい人を身に着るべきこと（ένδύσασθαι τὸν καὶ μὴθρωπὸν τὸν κατὰ θεὸν κτισθέντα）」は命令ではなく、「教えられた（έδιδάχθητε）」(21節)結果、あるいは、内容を説明する同格の不定詞とるべきであろう³¹。回心した者は古い人を脱ぎ捨て（アオリスト形）、新しい人を着た（アオリスト形）が、その上で新しくされ続けていく（現在形）。こうして「新しい人」、つまり神のかたちに従って新らしい人間性が創造される。神のかたちの回復は、眞の神のかたちであるキリストご自身を「学び」、キリストに聞くことに

²⁹ κατοπτριζόμαι は鏡を意味する κατοπτρον に由来し、「鏡の中にあるように見る」「鏡のように反映する」どちらの意味もあるが、ここでは後者であろう。

³⁰ κατοπτριζόμενοι は現在分詞、μεταμορφούμεθα は現在形であるから、変化は継続的である。

³¹ H. A. W. Meyer, *Critical and Exegetical Handbook to the Epistle to the Ephesians* (Peabody: Hendrickson, 1983), p. 474; J. R. W. Stott, *The Message of Ephesians* (Leicester: Inter-Varsity Press, 1979), pp. 180-3. なお、21節の εἴ γε … ἥκούσατε を新改訳は「ただし、ほんとうにあなたがたが…教えられているのならばです」と訳しているが、動詞は直説法アオリストであるから、教えられている事実を強調しているのであって、教えられているかどうか不明なのではない。

よって実現していくのである（同4:20-21）³²。

しかし、神のかたちの回復の完成は終末を待たなければならない。キリストの再臨の時、私たちはキリストに似た者となる（ヨハネ3:2）。それは「キリストのありのままの姿を見るから」である³³。「私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変え」られるところ（ピリピ3:21）、肉体の栄化のことであるが、キリストの栄光に与る栄化の一部と解することができよう。キリスト者がやがて「天に属する方のかたちを持つ（φορέσομεν καὶ τὴν εἰκόνα τοῦ ἐπουρανίου）」という言明も（Iコリント15:49）、栄化の包括的な表現と解せよう。パウロはここで「最初のアダム」と「最後のアダム」を対比し、創造から終末までを展望しているから、神のかたちの回復の完成に言及しているものと思われる。

このように、キリスト者の靈性の形成は神のかたちの回復に他ならない。キリストと一緒にされ、キリストが私たちのうちに生きておられるからこそ、眞の靈性が生じるのである。そしてまた、他の人々の内にも「キリストが形成される」ために「産みの苦しみ」をするのである（ガラテヤ4:19）。

IV. 三位一体の神と靈性

キリスト者の靈性が、御父の計画にしたがい、聖靈によってキリストに似

³² キリストにならうよう私たちは繰り返し命じられている（ヨハネ13:14-15、Iコリント11:1、エペソ4:32、ピリピ2:5-11、ヘブル12:1-3、Iペテロ2:18-25）。

³³ この文章をA. A. Hoekema (*Created in God's Image* [Grand Rapids: Eerdmans, 1986], p. 31)は結果ととるが、新改訳、新共同訳、口語訳、岩波訳のように理由と解するのがよい。それが文法的にも自然であるし、神を見ることによって神の栄光を反映するとある（IIコリント3章）からである。また、ヨハネが見るのは神だとする理解もあるが（バルバロ訳、フランシスコ会訳、R. Schnackenburg, *Die Johannesbriefe* [Freiburg: Herder, 1975], p. 170）、キリストの再臨に際してキリストを見、キリストのかたちに変えられる過程が完成し、神のかたちを完全に回復すると理解すべきであろう。cf. I. H. Marshall, *The Epistles of John* [Grand Rapids: Eerdmans, 1978], p. 172.

た者と変えられ、神のかたちが回復することにあるとすれば、まさにそれは三位一体の神の協同のみわざである。しかしながら、靈性の三位一体論的な考察をもう少し進めなければならない。

御父と御子の間には、如何なる者も介在できない特別な交わり、親密な交わりがある（マタイ11:27）。「父よ。あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいる」と言われているように、御父と御子は相互に内住し、一体なのである（ヨハネ17:21）。同様に、御靈と御父の間にも深い交わりがある。「御靈はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれる」（Iコリント2:10）一方、御父も「御靈の思いが何かをよく知っておられ」る（ローマ8:27）。さらに、御子と御靈の間にも特別な関係がある。御子の人としての誕生も公生涯における働きと教えも、御父に対する祈りも御靈によるものである（マタイ1:20, 3:16, 4:1、ルカ4:14、10:21、マタイ12:28、ルカ10:21）³⁴。御子の栄光は、御靈によって現わされるのである（ヨハネ16:14）。

神のかたちに造られた人間は、三位一体の神のこうした交わりを反映することが期待されている。人は三位一体の神との交わりと、人間相互の交わりに生きるために創造されたのである。しかし、造り主に背いた結果「主の御顔を避けて園の木の間に身を隠すとともに、「いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」（創世記3:7-8）。神との交わりを喪失するとともに、人間相互の愛と信頼の関係も失うことになったのである。

けれども、このような人間を神はお見捨てにならなかった。御子が罪責の一切を負われたゆえに、罪人が赦され神と和解させられた（Iヨハネ4:10、Iコリント5:18）。しかも、御子はご自身が持つておられる御父との親しい交わりの中に私たちを招き入れて下さった（マタイ11:27）。再び神の子とされた私たちは、「キリストとの共同の相続人」となったのである（ローマ8:17）。また、御靈も御父との親しい交わりに人を導かれる。御子が御父を「アバ、父」と呼ぶその祈りを共有する者へと聖靈は変えてくださった。

³⁴ イエスがその生涯を貫いていかに聖靈に依存していたか、Gerald F. Hawthorneが詳しく論じている（*The Presence and the Power* [Dallas: Word, 1991]）。

とより御父ご自身、親密な交わりに罪人を迎えてくださる方である³⁵。それゆえ御子は、弟子たちが御父と御子の内にいるようになることを祈っている（ヨハネ 17:21）。このような三位一体の神との親しい交わりに、私たちは招き入れられたのである。

ところで、そのような祝福を神との神秘的な合一と解することは適切でない。私たちはあくまでも被造物である。II ペテロ 1:4 にある「あなたがたが……神のご性質にあずかる者となるため（ἵνα……γένησθε θείας κοινωνοὶ φύσεως）」という言葉は、「世にある欲のもたらす滅びを免れ（ἀποφυγόντες τῆς ἐν τῷ κόσμῳ ἐν ἐπιθυμίᾳ φθορᾶς）」という表現とともに、ヘレニズムの宗教用語であり、密儀宗教においては神との合一、グノーシス主義者の間では神性の獲得と、理解されていたものである。また後に東方教会の神学においては、この個所を根拠にして人間性の神化（deification）の教理が展開されることになるが、著者の意図は当時の人々の宗教的希求に福音が十分応え得ることを明らかにすることであって、パウロやヨハネが聖霊による神との親密な交わりとして語るものではないと思われる³⁶。

第二のアダムであるキリストにあって神との交わりを回復した者は、人との関係においても変えられる。ここにもまた、三位一体の神の協同の御業がある。御父の愛は私たちを動機づける。罪人に一方的な恵みを与える御父の愛が、隣人を愛するよう促すのである（I ヨハネ 4:11）。また御子の愛は私たちの模範となる（ヨハネ 13:14-15）。弟子たちの足を洗ったイエスの姿がキリスト者の内に形成されるのである。そして、まさにそのことを実現す

³⁵ 中東の文化においては家長が長い衣を引きずりながら走るのは恥ずべきことなのに、放蕩息子の父は自ら駆け寄って、息子を招き入れた（ルカ 15:11-32）。神が人間にしてくださったのはこのようなことである。Kenneth E. Bailey, *Poet & Peasant and Through Peasant Eyes* (Grand Rapids: Eerdmans, 1983), pp. 181-2 参照。

³⁶ あるいは、読者がペテロの死後この書簡を読むことを想定していたとすれば (cf. II ペテロ 1:15)、終末時のキリスト者の榮化を表わすものとも解し得る (cf. 同 1:11, 3:1-13)。J. D. N. Kelly, *A Commentary on the Epistles of Peter and Jude*. reprint ed. (Grand Rapids: Baker, 1981), pp. 302-304; Richard J. Bauckham, *Jude and 2Peter* (Waco: Word, 1983), pp. 179-182 参照。

る方が御霊である。キリスト者はその内にお存在する肉において神に逆らう者となるが、御霊に明け渡し続けて行くなら、御霊の実が結ばれ、愛することのできる者へと変えられるのである。こうして、私たちは共に生きる者としての在り方を回復する。それは違いを認めつつ、しかも協力することができる姿である。全体の一致を求めるながら、個が重んじられることである。そのような有様が、キリスト者の形成する家庭において、教会において、社会において実現されることによって、三位一体の神の榮光が表されていく。そこに私たちは、キリスト者の靈性の最も大切な実体を見ることができる。真の靈性は教会を始めとする共同体の靈性なのである。

結び

新約聖書の教える靈性は、キリスト者が聖霊によってキリストに似たものと変えられ、苦難に耐えつつ神と人に愛をもって仕えることによって、神の榮光を反映するものとなるところにある。靈性は三位一体の神のみこころとみわざから離れて存在するものではない。聖霊に助けられて神の恵みに応答していくところに靈性は形成されるのである。